随筆　心の構造と機能を考える

山口晶

Essay: Thinking about the Structure and Function of Mind

Akira YAMAGUCHI

心というとらえどころのない事物、事象が人間を動かしていることは、多くの人たちが問題の主因を心の在り様に帰結させていることから、おおかた推論できます。

僕は老いて、いまやいくつもの病名を付与されています。血液検査では各種指標の上限少し上の値が出ます。子供の頃には病弱であったにもかかわらず、シュバイツアー博士に憧れて、医者になることを志しながら、好きな植物に走ってしまいました。長じるに及んで健康になり、その後、医者や薬嫌いで生きてきました。働き過ぎで、足腰が痛み出して、30 歳頃に医者に捕まってしまいました。これは何とか切り抜けて、フィールド調査や実験に多忙な日々を送り、何とか体の痛みは騙しおおせてきました。ところがついに、足先の痛みで、薬を飲みました。A 病院の B 医師にはもう何年も３ヶ月に 1 回検査をしていただいています。薬は嫌いだと抵抗したのですが、痛みに耐えきれず、妥協の道に踏み込んだのです。薬を常用して、明らかに改善しました。

さらに高齢者健康診断でまた重ねて病院に捕まってしまったのです。男性には珍しい病名がつきました。昆布やワカメなどの海藻を正月前後に好んでたくさん食べたので、発症したのでしょう。といって自覚症状はないです。血液検査のデータで数値が高いことは認めます。A 病院の C 医師に、D 医院の専門医 E 医師あての紹介状を書いていただき、検査を受け、薬をもらい、数値的には改善されました。海藻も食べないようにしています。

ところが、A 病院では C 医師ではなく、F 医師に継続診療を予約されていて、重ねて定期検査を継続し、投薬も受けることになっていたのです。どういうわけか、専門医 E 医師に継続して見てもらうことでよいはずが、なぜか A 病院で重ねて診察を受けることになっていたのです。そこで、D 医院の方を辞退することにしました。

さて、ここで問題が起こりました。D 医院の薬処方と A 病院の処方が違うのです。チラージンという薬の量は同じですが、D 医院の処方は白 1 錠 75 μg、A 病院の処方は白 1 錠 50 μg+赤 1 錠 25 μg です。D 医院の薬が無くなったので、A 病院の薬を飲み始めてから、体中がかゆくなりました（過敏症状）。あまりにかゆいので G 皮膚科医院に行き、眠気も酷いので H 脳成形科医院、I 眼科医院にも行きました。目も脳にも特に異常はない、しかし何が原因なのか、医師はどなたも応えてくれません。どんな薬にも「かゆみなどが出たら、飲むのを中止しなさい」と書いてあるので、その薬が原因であるとは証明できないといわれ、原因は特定されずに、そこで説明はなく終わりでした。

薬局で渡された説明には、鉄剤に注意がいる。かゆみ等の過敏症状が出たら中止すると書いてあります。インターネットで薬の副作用を検索しました。上記の赤 1 錠 25 μg の色素が原因であるとの専門学会誌に論文がありました。この色素は三二酸化鉄です。それでも医師の皆さんは素人が何を言うのかとお怒りの態度で、明確な回答はして下さらなかった。科学的に原因を特定しなければ、発疹の解消はできません。そこで、D 医院の専門医 E 医師に強く乞うて、薬

を飲むのを 10 日ほど止めました。そうしたら、ひどい発疹はなくなりました。血液検査データの推移、大阪の専門医の見解、などを見せて、赤 1 錠 25 μgの色素が原因との論文記述もあると言ったのですが、聞き流されました。原因が特定されなければ問題は科学的に解決しません。

老いてから病院のはしご通いですが、おおかたの医師は症状を観察せず、患者の話を聞きません。血液検査のデータだけで慣例的に処方を決めています。科学という方法論は事象の観察が第 1 であるはずです。どうも医師には科学の論理も倫理も衰退しています。再び、薬量を減らすなど、自己判断するしかないです。結局、まだかゆいです。自己判断でチラージンは飲むのをやめました。

僕の親友はアフリカでのフィールド調査から帰って、マラリアに感染していて、あっさり死にました。日本の大学病院の医師はマラリアを知らなかったのです。彼はごく真面目に抗マラリア薬を飲んでいました。僕は薬嫌いですから自己判断で半量しか飲んでいませんでした。薬や医師は過剰に信じずに参考意見として聞き、今まで通り自分の体調に聞いて判断するべきだと思いました。五感、直観という心の機能を養うことです。